

子ども・青年の発達と教育

人が育つ・人間らしく育つを基軸に日常実践の高まりを

飛田 登美夫

はじめに

今回の通常の参加者は一三名ほどであったが、一日目には大谷短大保育科・二日目には教育大学札幌校の学生一八名も加わってくれた。

自己紹介の後、共同研究者の内島貞雄さんから分科会討論の四つの課題が示された。

① 福祉的な視点を含んで教育実践を展開する。
② 自分の人生、今後の社会に対する根源的な問いを大切にし、聞き取る。

③ 基本的な学力の基礎の形成や定着を図るさいに、子どもの意識や表現をとらえながら、教師と子どもたちとの関係と切り

離さないでとりくむ。

④ 教育政策や行政の動きを批判的にとらえる。

今回の分科会では、これらの課題がより一層深められたように思う。

一 子どもと繋ぐ表現活動

伊達市立稀府（まれっふ）小学校の佐茂厚美さんから「子どもと繋ぐ表現活動」と題するレポートがあった。

佐茂さんは昨年もこの分科会で、同僚の安住さんと報告した「プロメテウスの火」が、稀府小学校の教職員に大きな衝撃を与え学校内に「どうやったらあのように歌えるのか!」という意欲を創りあげた。そんな中、自主的な公開研究会を開こうではないかという提起が学校長から出された。例年、市内持ち回りの研究会ならいざしらず、自主的公開研究会となれば、教職員や子どもへの負担の心配など戸惑いの声も上がった。しかし、授業だけでなく、昨年に続き合唱を中心とする全校合唱も発表することで合意された。推進の中心になる研修体制の中に「チーム表現」が組織された。（研修紀要から）

① 全校的な表現活動（合唱・群読）を通して
・考え方↓学芸会で発表する合唱・群読の活動は「出し物とし

て成功させる」ことではなく、「子どもの力を伸ばす」ことをねらいとしたこと。

・活動場面↓各学級による準備の後に、全校活動を行い月一回程度組織したこと。

・なぜ 合唱・群読か↓集団で行い、みんなで作り上げる表現活動である。個人での歌の楽しみや音読だけに留まらず、お互いを感じ合って息を合わせ、一つのを作り上げていく。人間相互のコミュニケーションの手段の一つとして取り組む中で一人では感じることはできない共鳴感の獲得。

みんなが集まった時にできる声の厚みやハーモニー、言葉が持つリズムなどの面白さや楽しみを理解する。又、そこに美しさを見出し、作り上げる価値を感じることで、さらに自らかかわって自分を表現していこうとする子どもを育てたいと願う重たい意図がある。

・指導上の留意点↓自分をのびのびと表現させ、自閉化した心と体を解放させる。子ども同士の信頼感、間違えることができる風土、安心して過ごせる環境づくりが必須。を教職員の共通認識として「子どもが繋がっていく実践」を展開している。

・具体的な活動↓(合唱)歌えば歌うほど、子どもたちが入り込めるような力を持った教材を選択している。(群読)全校

と学級が同じリズムののって息を合わせられるような教材の選択

② 集団づくりを通して

視点1 子ども同士の関係づくり↓受け入れられる安心

感。自己肯定感から他を認める気持ちへ。

視点2 高め合う集団づくり↓正しく前向きな考え方が支

持される風土。友達と学び合う姿勢。友達の良さ

を真似る、良さから学ぶ気持ちを子どもたちに求め、培おうと粘り強く実践をされている。

③ 「力のある教材」について

稀府小学校の実践の中で表現活動に取り組む際、力のある教材が必要と押さえている。その力のある教材とはどのような教材なのか？佐茂さんが自問自答を繰り返し、多くの教師や研究者と検討を続けてきたが、やはり何かは説明は出来ないと思懐している。ただ、表現活動は、教育の一分野であるが、しかし、教育全体を、豊かで、子どもの可能性を拓くものにする力があると確信されている。とりわけ、現在の「学力テスト体制」という「偏狭」とも言える「教育」が、全ての学校と、そこで学んでいる全ての子どもを巻き込んでいる現実の中で、その思いが強くなっている。と結ばれ大きな問題提起と示唆を頂いた。

二 道徳の授業への模索

瀬棚中学校の村田真一さんは「道徳授業の中でコミュニケーション活動の実践」の報告を行った。

全校生徒七五名。各学年一学級。赴任一年目の一年担任。

①日に日に子どもたちへの愛着が。

学級スタート当初。元気が有り余っている男子。男子に負けず劣らない女子。色々とやらかす。転勤早々、こんな大変な子どもを担任させるなどなんて言う学校だ！しかし、日に日に子どもたちへの愛着が増してこのクラスを卒業までみたいと。

②道徳授業への基本形に疑問。

導入↓展開前半↓展開後半↓終末。展開後半で「自分はどう？」と問うと、黙るか教師の期待する答が大半。やればやる程、教師の意図に迎合する建前を発言させているのでは。出来もしないきれいごとを教えなくてはいけないのだろうか。道徳授業の質的転換へ。

③コミュニケーション活動の導入。

村田さんは子どもたちのお互い・そして自分を見つめることが出来る授業展開を図った。コミュニケーション活動プログラムと位置づけて、ショートプログラム。ロングプログラム。更に、道徳ワークシートも活用しながら子どもたちの心の繋がりを

と融合を目指している。

④教育活動の困難さを克服するために

最近の子どもたちの傾向として小グループ化が強まり、放っておいたら、一年間、同じクラスなのに一度も話さないという状況が起きるのでは。「学力向上」「いじめ根絶」のアリバイづくりのようなことばかりやらされて・・・。「教育とはなんぞや！」といつも自分に問いかけていきますと結ばれた。

個性的な教育への営みと先輩たちの豊かな実践を学び一層力量を高めて下さい。

三 学力・学習状況調査から子どもの

生活習慣の改善を

室蘭栄高校定時制の市居誠二さんは全国学力・学習状況調査「学力は子どもの生活環境を反映する」と報告された。

市居さんは全国学力・学習状況調査の賛否の中でも忌み嫌わずにそのデータを眺め、問題を探ろうと提起された。保護者の離婚率、生保保護受給率、完全失業率等の細かな分析を通して

①母子・父子家庭の割合と学力調査正答率に強い負の相関を示すこと。

②都道府県別の成績にランク付けをすることに意味がないこと。

③学力はどうしても受験勉強に結びつけられ「授業のテクニク」「親の熱心さ」「学校のレベル」に関心が向いてしまいやすいこと。保護者ばかりでなく教員もそう考えてしまうことから、慎重な分析が必要なこと。

④学力だけでなく、全道規模の分析を行い各地域が抱える課題を明らかにし「幅広い施策で生活習慣の改善」をしていく働きかけこそが大切と指摘された。

討論の中では、・エリート育成のための施策を、全ての子どもたちにやらせているのではないか。・評価によって教育的活動よりも管理につながっていないか。イギリスでは学校ごとに教科書が違う。又、学校裁量や教師の裁量も認められている。北海道という地域を考えれば、もっと多面的な学力の求め方も必要に思えるなどの意見が出された。

四 新任校での教師としての葛藤

北海道未来高校の高野絢さんは、四月当初の新任校の状況（特に管理職とのやり取り）「未来高校での7ヶ月を振り返って」としてレポートされた。

管理職の理不尽な言動は珍しくはないのですが、報告の中から、その一端を紹介すると「部活指導や残務処理があるので、5月の連休中に引越しなさい。今まで期限付き教員や、時間講師をやっていたようだけれど、ただ教科指導だけやればいいっていうものじゃない」このようなやりとりが、一学期中続く。

自分の方に落ち度があるのかも考え、大学の研究者や先輩同僚にも意見を貰い確認している。教育労働者として譲ってはいけない面は自分の主張を通そうと努力している。これらの問題を一個人の問題とすることなく学校の民主的運営という面とも絡めて取り組みたいものです。ただ、教職員の勤務に関して大きな問題になっている昨今の状況も踏まえ、口頭確認ではなく正規勤務日と年休行使を明確にするなど慎重な動きが必要と思われまます。併せて、日常の忙しい日々の中でも、一教師としての研修や良き同僚・先輩からの学びを強め素敵な実践報告を頂きたいと考えます。

五 普通高校における特別支援教育

北広島西高校の大澤信哉さんから普通高校の特別支援教育の報告が行われた。

北広島にありながら、札幌市内からの通学者が8割を越え、

通学だけでなく部活動や行事に困難性を抱える。生徒数は九二四名の普通科8クラスの大規模校である。内面的に穏やかな生徒が多く生徒指導面では比較的苦労は少ない。しかし、特別支援を必要とする傾向の生徒は年々増加している。2007年の「特別支援教育」の導入を機に教師個人の1対1の対応から組織的な対応を確立した。2009年に、校務分掌「保健部」教育相談係の配置により大きく改善された。特に「発達障害」への対応が強化され、数年前には職場内での浸透が弱かった点を研修や日々の実践に協同であたる過程を経て、徐々に理解が広まり指導もやりやすくなったことなどがあげられる。

①「特別教育相談」のとりくみ。

毎年年初めの4月に新入生入学式とPTA総会の理解を得て、学校生活不適應、心身症傾向の生徒の早期発見、当該生徒の保護者とのスムーズな連携を図る目的で取り組んでいる。

②特別支援教育に関わる校内研修会

2009年「普通科教育における特別支援教育のありかた」、2010年「特別支援教育（応用編）〜発達障害のある生徒への実践的な援助方法と保護者との連携のあり方について」、2011年「特別な支援を必要とする生徒の指導について」、2012年「教育相談に生かすコーチング」など、教師一人ひとりの努力とチームとしての「特別支援教育」体制の高まりを学べる貴重な報告を受けた。

六 教職課程科目「教育相談」での大学生の学び

本分科会で司会を務めながら、毎年多彩な視点での授業実践を発表してくれている北海学園大学非常勤講師の池田孝司さんは、教職課程科目の「教育相談」での大学生の学びについて報告された。講義の基本構成として

①学生の集中力の維持を考え時間を2つに分け半分をレクチャー、残り半分をアクティビティ（模擬カウンセリング、ペア討論、グループ討論、意見整理・発表）または映像教材の活用もされている。更に、心理検査の体験も実施している。

②深い理解と課題意識（自主的学習の契機）づくりを目標されている。教員養成では「実践的指導力」の育成と盛んに言われているが池田さんは、「発達理論、子ども理解の思想と方法、子どもを取り巻く環境・関係、今までの教育実践の財産などを知ることなしに、表面的な対処法を学ぶだけでは、子どもとの実際の関わり、理解、実践創造は難しいと考え、学生たちが深い理解（認識）を行うこと。」そこから、自主的な学習への意欲が生まれていくようにすることを心がけられている。

③ガンバリズムでない教師スタイル・若い教師の中途退職、自

殺などの事例がある。新自由主義競争主義の中で育った学生は人のために役立ちたいと言う面と自己責任論にも縛られ狭い世界からのガンバリズムに陥りやすい状況を指摘され強く危惧されている。

受講学生の感想を紹介するとAさん「教育相談の講義でまず印象に残っているのが、自分を追い込むということですが、ボクは完全に自己責任論者です。何かあるとすぐに自分の責任にしています。ですが、この講義を受けて、決してそうではないということがわかりました。克服するには時間がかかりそうですが『自分のせいじゃない』と思える人間になりました。

Bさん「困った子は困っている子」という考え方には非常に感銘を受けました。ADHDの他にも、様々な理由で手のかかる生徒もたくさん受け持つことになると思います。そんな時に自分の思い通りに行かず、邪魔になるような生徒であったとしても、すぐに叱りつけたりはせず、まずはその生徒と対話できる機会を設け、きちんと生徒の思いを聴き受けて、生徒とともに悩み、協力し、改善していきたいと思うようになりました。また、この考え方は「モンスターペアレント」と呼ばれる保護者の方々との関わり合いでも大変重要だと思いました。教師になってからは、是非ともこの考え方を胸に刻みつけておきたいと思いました。」

まだまだ、素敵な感想が紹介されていますが、本当に暖かい取り組みをされています。この取り組みを通して教師養育実践の創造とともに、更に深い実践を継続していくと結ばれました。

おわりに

二日間の分科会を通して貴重で多くの学びが得られたと実感しました。行事を通して、単に成功させるという意識ではなく、「子どもたちの力を育てる」という認識。表現活動における「力のある教材」への追求。道徳授業での民主主義教育の財産である「生活綴り方教育」への接近。子どもたちに本当に必要な学力とは。教師の成長には、どのような学びを求めるべきか。特別支援教育の発展に向けての展望。そして、それらの根底には「人が育つ・人間らしく育つ」を共通課題にしながら本来、「教育とは何か」「教育のもつとも本質的な営みとはどのようなものか」が確認されたと思われます。共同研究者の内島先生が最後に、「アットホームの分科会ですごく良いなあ」との言葉が本分科会そのものと考えました。

(教育科学研究会)